

1. 特に効果的であり改善に資した事例

E. 学習・研究環境の改善

⑤その他

⑤その他

《人社系》

●奈良女子大学人間文化研究科国際社会文化学専攻、社会生活環境学専攻
「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- ・大学院生のキャリア形成のために、自主的研究活動を促し支援すべく「キャリア形成のための院生自主企画」に対して経費の一部（講師旅費、謝金等）を助成した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・通常の講義等の中で取り組むことが難しい企画・マネジメント力を発揮する実践の場を提供して大学院生の専門職キャリア形成の一助とするために、博士前期課程及び後期課程の大学院生を対象に、「キャリア形成のための院生自主企画」に対して経済的支援を行い、研究会やセミナー、ワークショップ等の自主的、積極的な開催を促し、大学院生が企画・マネジメント力やコミュニケーション力を発揮する場を容易に設定できるように工夫した。また、その際に院生から相談があれば必要に応じて教員がアドバイスを行うようにした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・大学院生の学会発表及び論文発表が、博士前期課程、後期課程ともに大幅に増加し、大学院生の研究や発表に対する積極性、自主性や意欲が大きく向上した。

●上智大学グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻
「現地拠点活用による協働型地域研究者養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

上智大学がカンボジア王国シェムリアップ市に有するアジア人材養成研究センターを、本プログラムの海外拠点と位置づけ、学生の訓練機会や調査への情報および利便を提供した。現地常駐職員の他、講義期間が終わって学生の現地調査が集中する期間には、本プログラム採用のプロジェクトPDが常駐して、様々な研究プロジェクトと連動しつつ学生の研究調査を支援した。エジプト・アラブ共和国カイロ市には、日本学術振興会カイロ研究連絡センターの一角を借り受けて、上智大学カイロ研究センターを開設し、こちらにはプロジェクトPDが常駐して、同様の支援にあたる他、現地および周辺各国の教育研究機関との協力体制構築、本専攻への入学希望者への対応などに従事した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

海外に恒久的な拠点を築き維持することには、それぞれの国の事情なども絡み様々な困難があり、本プログラムの実施期間中に限ることなく長期的な視点をもって、拠点の維持拡大に努めるよう留意した。カイロ研究センターの常駐プロジェクトPDについては、本学の教員としては、海外を常駐の勤務地とする初の例であったことから、海外危機管理会社

1. 特に効果的であり改善に資した事例

E. 学習・研究環境の改善

⑤その他

と契約をなすなど、今後の取組に有効な制度的枠組みの整備にも気を配った。また、拠点
を有効に活用する観点からも、専攻単体ではなく、本学の研究所や大規模研究プロジェク
トの活動との連携に力を入れ、その連携が学生それぞれの調査研究の推進に活かされる方
法を模索した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

海外拠点の存在は、拠点がある地域で調査研究を実施する学生にとっては多くの点で直
接的利益をもたらした。カイロでは2010年以降政治的に不安定な状況が続き、年末には一
時的にPDを国外退避させなくてはならない事態に陥ったが、調査中の学生の安全確保にも
拠点は有効であり、2011年3月以降速やかに学生への支援を再開できたのも、拠点があれ
ばこそであった。費用的な問題から大規模な学生の調査訓練などは、他の研究プロジェク
トとの連携が必要だったが、これも拠点があることによって円滑な連携を実施できたとい
える。加えて、周辺諸国の研究教育機関と専攻との教育と研究の両面にわたる連携も、海
外拠点を介在させることでいっそう円滑に運ぶことができた。

〈理工農系〉

●九州大学生物資源環境科学府

「生物産業界を担うプロフェッショナル育成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

教育成果の見える化に向け、質的調査を継続的に行った。量的調査としての講義後アン
ケート、プログラムアンケート、学生生活調査(院入学時)を行うとともに、以下に示す事
項を実施した。

プログラムオリエンテーション、講義の狙い等を受講(希望)生に対して丁寧に行った。
受講生には、各講義で得た学びや気づきについて、WEBシステムを利用した教育カルテ(e-
ポートフォリオ)への書き込みを義務づけ、担当教員は、各受講生のカルテに対して、コ
メントを行うことで、講義後の課題発掘や講義後の課題解決を徹底することで、逆に講義
受講目的の明確化を行った。さらに、受講生に対して年2回の面談を行い、学びの定着度
を確認するとともに、講義後との学びや気づきを他の講義のそれらとつなげることで、そ
れぞれの学生の目標設定や達成度評価を一緒に行った。

それぞれの講義においては、教職員による参与観察を行った。これは、本プログラムで
提供する講義が、系統学習的なものではなく、学習集団に対して均質な効果を予測するこ
との困難性が高いことへの対応である。また、修士1年や博士後期2年の院生にとって、
就活は非常に大きな課題であり、強みを伸ばすことより弱点克服(コミュニケーション力
やプレゼンテーション力の向上)に注力する学生が多いことも本プログラムの特徴である。
避けて通りたいことに対峙する際の気持ちの安定へのケアも、参与観察を通じて意識した。

これらを背景に、学生が「今」必要としていることをしっかりと抽出し、彼らの「未来」

1. 特に効果的であり改善に資した事例

E. 学習・研究環境の改善

⑤その他

につながる課題を一緒に考える時間を作り出すことを意識した。さらに、プログラムの評価（PDCA サイクルの実質化）を教職員ばかりでなく、国内および海外企業からの外部評価委員やプログラム受講院生にも参加してもらい定期的に行った。また、プログラム支援室を設置し、受講生との交流・受講生同士の交流の場を提供し、プログラム改善に向けた課題抽出を恒常的に行えるシステムを構築した。

（実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと）

教育カルテの目的は、経験の物語化であった。自らの学びや気づきを言語化・文章化する習慣は、就業後により重要となることである。経験に学ぶのではなく、歴史に学ぶ姿勢を身につけるため、自らの経験を物語化することが重要であると考えた。キャリアとは経験の言語化であるということは徹底できたと考えている。

面談においては、教育カルテを見ながら、それぞれの学びや気づきをつなげていく作業を行い、経験の物語化を支援した。また、つながることの重要性を院生と主に具体的に指摘しあうことで、均質な学習効果を予想することが難しい、本プログラムの弱点を補強した。

参与観察を徹底することで、ドロップアウトしそうな院生への支援や弱点克服にあえぐ院生への支援を行うことが可能となった。弱点克服を必要以上に意識させないことで、Strengths-based Approach 的な講義形態を維持することを目指した。

（どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか）

3年間という限られた期間ではあったが、プログラムの方向性を明確にすることやカリキュラム改善・講義改善の仕組みを作り上げることができた。かなり労働集約的で、マンパワーが必要であるという問題が浮き彫りとなったものの、努力目標がしっかり設定できたことは大きな成果であると考えている。

院生達の「今」をしっかりキャッチし、院生からの投げかけに必ず応えていくという当たり前のことの重要性や困難性を感じた。しかし、この当たり前のことを教員個人としてだけでなく、大学という組織として行っていくことこそが、教育の質保証であろう。院生達の「今」に対して、院生自身も深く考える必要がある。立ち止まり、状況を把握し、要求を明確かつ妥当なものとして組織に投げ返すための場づくりにも注力してきた。経験を言語化・文章化し、他者と対話しながらより深いものを彼らの中に生み出す手伝いができる場を構築することも、教育の質保証となり得ると考えている。

●芝浦工業大学工学研究科地域環境システム専攻

「シグマ型統合能力人材育成プログラム」の事例

（具体的に何を実施したのか）

- ・優秀な大学院博士（後期）課程学生をラーニング・ファシリテーター（Learning Facilitator：以下 LF と呼称）として雇用し、教育研究の支援業務を委嘱する LF 制度を

1. 特に効果的であり改善に資した事例

E. 学習・研究環境の改善

⑤その他

導入した。学部・大学院の教育・研究の質向上を図ることと、当該学生の教育能力・研究能力の向上と、手当を支給することによる経済的支援を目的として実施した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・ LF には、各研究室における学生指導や研究の支援業務の他、全学に共通した学生生活や教育研究活動における問題点の発掘や解決策の提案を委嘱した。基本的には、LF 自身の視点による自主的な活動となるように配慮した。
- ・ LF 制度の実施にあたっては、担当の教員、事務スタッフを配置し、定期的 (1 回/月) に、LF 研修会を開催し、LF の活動を支援した。
- ・ 年度初めには、各 LF に「研究内容や将来の希望職種に関するアンケート」と「LF キャリアプランと行動計画」を作成させ、LF 自身のバックグラウンドや進路の希望を把握し、指導の指針とした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・ 学部学生や大学院生を対象に、研究室生活に関するアンケートを実施し、「充実した研究室生活をすごすためのガイドライン」と題したリーフレットを作成し、全学に配付した。LF 活動の成果として挙げられる。
- ・ LF による自己評価結果からは、複眼的工学能力、技術経営能力、メタナショナル能力に対する向上が見られる結果となった。
- ・ これまで孤立しがちであった博士課程学生に対し、学生間の交流の場が提供できた。

《医療系》

●東京医科歯科大学保健衛生学研究科総合保健看護学専攻
「看護学国際人育成教育プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- ・ 国際的に活躍できるためのアカデミックマナーを習得するための教育方法の一つとして、英語によるコミュニケーションの方法、英語によるプレゼンテーションの方法、アカデミックパブリケーションの方法などの DVD や CDR を製作し、教育で活用した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・ 大学院生と協働して内容を吟味し製作した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・ 大学院生のニーズに沿った内容となり、視聴覚教材の有用性が高まった。これらの視聴覚教材を講義や自己学習などに有効活用でき、学習効果を高めることができた。
- ・ 本学の大学院生のみならず、母国語が英語ではない国の大学院生や、国内の他大学の大学院生にも希望に応じて配布し有効活用することができた。